

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

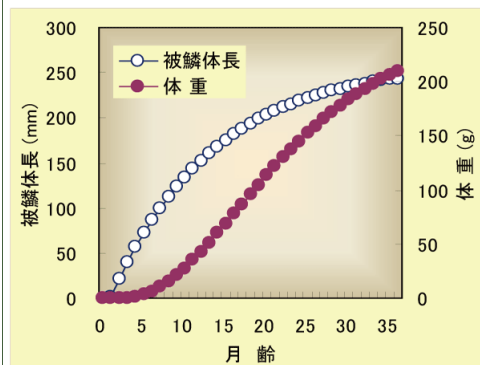
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
索餌期・索餌場: 夏～秋季、日本海西部～東シナ海
食性: 稚魚期・成魚期ともカイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者: 大型魚類やほ乳類、海鳥類、頭足類

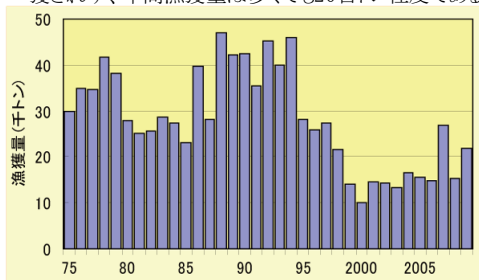


漁業の特徴

ウルメイワシ対馬暖流系群は、東シナ海区(福岡県から鹿児島県)では中小型まき網や敷網により、日本海西区(福井県から山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網、敷網により漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網、敷網、まき網などで混獲される程度である。漁獲が多いのは、東シナ海区と日本海西区である。なお、東シナ海区と日本海では、沿岸での釣りや刺網による漁獲はほとんど行われていない。

漁獲の動向

東シナ海区において1981年から1997年までは72百トン～16千トンであったが、2000年にかけて減少した。その後増加に転じ2009年は13千トンである。日本海西区において1980年代半ば以降漁獲量が増加し、1992年には31千トンになり、その後減少したが、2001年以降の漁獲量は60百トン～11千トンで推移している。日本海北区では、あまり漁獲されず、年間漁獲量は多くても20百トン程度である。



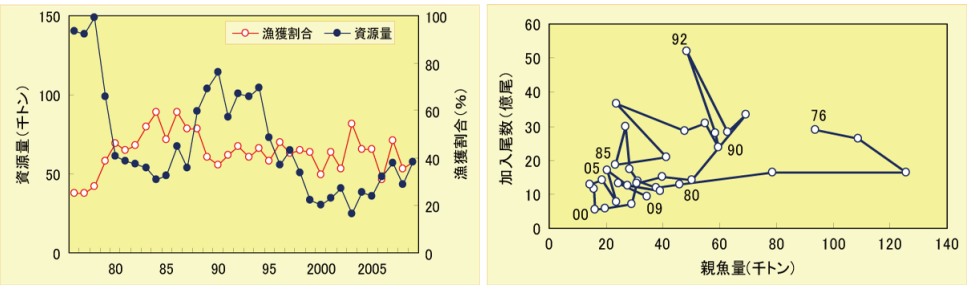
資源評価法

日本海および東シナ海における産卵調査、計量魚群探知機を用いた現存量調査を参考とし、月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源評価を行った。

資源状態

1970年代後半から1980年代半ばにかけて資源量は減少傾向にあったが、1980年代後半から1990年代半ばにかけて増加し、その後再び2000年代前半にかけて減少した。2001年以降は再び増加傾向にあったが2008年に再び減少した。2009年の親魚量はBlimit(27千トン)を上回っており、資源量や親魚量などから総合的に判断して水準は中位と判断した。動向は過去5年間の資源量の推移から増加と判断した。





管理方策

資源管理の基準となるBlimitの推定は、加入量の上位10%を示す直線と、再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近い1984年の親魚量27千トンでBlimitとした。2009年の親魚量は34千トンでBlimitを上回っている。2010年以降のRPSを近年10年間の中央値で与えると、現状の漁獲圧で資源は増加する。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	29千トン	Fcurrent	0.92	34%
ABCTarget	25千トン	0.8Fcurrent	0.74	29%

- Fcurrentは2009年のFで、Fは各年齢の平均

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源量は増加傾向にある
- 親魚量はBlimit以上である

管理方策のまとめ

- RPSが近年10年間の中央値で推移すると仮定した場合、現状の漁獲圧のもとで資源量は増加すると考えられる

執筆者: 大下誠二

資源評価は毎年更新されます。